

アスペルガー障害児に対する音楽療法

ー音楽聴取と描画を組み合わせた活動を通してー

野 尻 恵美子

(2005年1月19日受理)

I. はじめに

アスペルガー障害は広汎性発達障害の一種であるが、対人行動や言語的、知的な活動はむしろ活発な面もあり、いわゆる「自閉症」とは言い難い。基本的特徴として社会的技能の無さ、相互に会話を交わす能力の乏しさ、特定の題材に強い興味を持つことなどがあげられる。

音楽療法是芸術療法のひとつとして位置づけられており、芸術療法には絵画療法なども含まれる。芸術療法的な意義は、それらの治療技術の中で、その表現の根底にイメージ表出という意図がまず優先し、重点がおかれているということである。また芸術療法の共通点として、治療的過程において、言語的表現に代替される前に、まずイメージ表出を優先し、それを媒介としてコミュニケーションするという点があげられる。

芸術療法の主流は、このような非言語的表現が患者の意識下に抑圧された心理的葛藤を最もストレートに表現する機会を作ることを目指し、それを精神療法に役立てていくのである。

音楽は人間の機能としては、聴覚系と深く結びついており、脳を中心とする身体的機能と密接な関係を持っている。さらに音楽活動をするという水準では、触覚、視覚、運動系との協調が必要になり、統合的心身活動が求められる。

発達障害児の治療に音楽が利用される意義のひとつに、感覚運動段階の原始的水準から抽象的思考様式の段階まで、様々な段階の認知機能に対応する音楽活動が準備できることにより、色々な発

達水準の児童にも、音楽活動を通して、発達促進的に働きかけることができるということがあげられる。

本対象児に対する治療は、平成13年4月から行っており、平成13年12月までの経過は仁愛女子短期大学研究紀要（第34号）に記載した。今回はその後の経過を中心に述べたい。

II. 目 的

対象児はアスペルガー障害の診断を受けているが、その特性として、情報をパターンで処理する傾向が強く、象徴機能の発達に遅れがあった。言語に関しても特定の場面において毎回全く同じ話をするなど、パターンで使われることが多く、充分コミュニケーション機能としての役割を果たしていなかった。そのため音楽療法のなかで、視覚優位であった対象児に音楽を聴いて連想する働きを利用する技法と描画を組み合わせた活動を行った。そして対象児のイメージを膨らませることにより、パターン処理の段階から象徴機能の発達を促し、いかに柔軟な認知機能が発達、促進したかを分析、検討することを本研究の目的とする。

治療仮説として精神療法としての音楽の活用技法のひとつである「BASIC TONE」(松井)のなかの、主に association (連想) と story construction (物語構成法) を用い、そこに描画活動を取り入れることによって、象徴機能の発達を促し、現実の外界環境に基づいた認知機能の発達を促すことが可能であると考えられた。

Ⅲ. 方 法

① 対象児について

対象児は平成8年生まれの男児であり、現在普通学級に通っている小学2年生である。

家族構成は、両親との3人家族である。日常生活に関しては自律している。交流の状況は、言語コミュニケーションは可能であるが、状況に合わない独り言も見られる。セッションの場面では、ある活動を行う際に毎回同じことを言うなど、パターン化していることがある。また対象児に話しかけても全く聞いていないように感じることもあり、会話が成立しないことがある。

認知機能の発達段階は、曲の開始と終了、高低、強弱、テンポは理解できる。リズムの模倣も符点が多く使用されるような複雑なものでなければ、四分音符八分音符程度の長さであれば可能である。文字はひらがなの他に、学習した漢字も書くことができるが不器用さが目立つ。数の理解もある。描画も可能であるが、描画活動を取り入れた初期の頃は特に、対象児、両親の顔がすべて同じように描かれるなど、表現力の乏しさが見られた。音の認知は聴覚だけでは困難であり、ピアノを使用した際は、鍵盤の位置を視覚で確認することにより認知している。

行動特性は先にも述べたように、パターン認知の強さが目立ち、毎回同じことを行わないと気がすまないところがあるが、治療開始時よりは改善された。その他対象児との会話の中で、急にアニメの話など、状況に関係ない内容のものが出てきて意味が通じなくなることがあり、現実と非現実の区別が困難であると感じることがある。また課題をわざと間違えることがあり、セラピスト（以下 Th）の指示に従わないことが多い。Th に反抗する際に家庭で両親が使用している言葉（例えば「誰に向かってものを言っているんだ」など）を発することがあり、年齢に合わない言語の使用も見られる。それも意味を理解しての使用ではないと考えられる。またピアノを弾く際、極端に指の使い方が不器用であったことから、手先の細かい作業は苦手であると考えられる。

[初診時の様子]

二語文程度の言語コミュニケーションは可能であったが、それ以外の状況に合わない独り言の多さが目立った。それは TV やビデオの内容であり、聞いたことを理解せずにそのまま発していた。まるで録音されたものを再生しているという印象であった。楽器など、様々なものに興味は示すが、特定のものに集中することは困難であった。また物の配置にこだわりがあり、対象児が置いた遊具などを Th が少しでも動かすと非常に嫌がった。日常生活の場面では、対象児よりも小さい子を怖がるとのことであった。

平成12年7月にアスペルガー障害であると診断されている。音楽療法開始時、対象児は5歳であった。

② 治療構造

期 間：

平成13年4月～平成16年12月 現在継続中

場 所：

仁愛女子短期大学音楽館

スタッフ：

メインセラピスト 学生コワーカーが参加することもある

S12までは母も参加していたがS13からは対象児が集中できないという理由で入室しなくなった

頻 度：

週1回45分の個人セッション 計86回

③ 長期目標

言語コミュニケーションの発達

柔軟な認知機能の発達

Ⅳ. 経過と結果

治療過程の中で対象児の変化に伴い、3つの期間に分けて治療経過および結果を述べる。

第一期 短期目標

コミュニケーションとして意味のある言語を増やす 平成13年4月～14年3月 S1～S33

治療開始時の対象児は意味の分からない独り言をよく発しており、コミュニケーションとして機能する言語が乏しかったため、意味のある言語を増やすことを目標においた。

この時期の初期は対象児の好む活動を知るため、様々な楽器や遊具を用意し自由構造でセッションを行った。その中で対象児はボーリングやミュージックパッドなどを好んだ。それらはルールを覚えればパターン処理で行える活動であった。このように対象児の好む活動を提供し、Th が対象児にとって欲求充足の対象となることで、対象児に Th とコミュニケーションをとろうとする意欲を持たせることが出来た。次の段階である課題設定の構造の際は、Th の弾くピアノが止まったら対象児も楽器を鳴らすのを止める活動や合奏を行った。対象児は聴覚と行動の協応は出来ており、また Th が指示したテンポでたたくことが可能であった。これらの活動により、Th と対象児の間での非言語コミュニケーションを深めることが出来たと考えられる。

この時期の中期では、視覚と聴覚の発達のため、対象児に様々な楽器を提示しそれぞれの音を聴かせ、対象児の見えない所で鳴っている楽器の種類を当てるという活動を行った。さらに対象児の発達段階に応じて、実際の楽器の代わりに文字で楽器の名称を書いた紙を見て当てる活動に段階をあげていった。また楽器で Th が 4 までの数をたたき、対象児に模倣させる活動も行った。これらの活動によって視知覚、聴知覚の発達と統合を促すことが出来たと考えられる。

治療開始時から対象児はそのパターン処理能力の強さから、一定のルールを覚えてしまえばこなせる課題は得意であるが、その反面自由な表現力や創造性が極端に乏しかった。そこでこの時期の後期からは、積み木や描画活動などを取り入れ、象徴機能の発達促進とそれに伴って自由な創造性の発達を目指した。対象児は常に同じものを作ったり、描画することが見られ、その際話していることまでが同じであった。しかし音楽の持つコミュニケーション機能を利用し、対象児と Th の間で充分非言語コミュニケーションを深めることによって、対象児の言語は状況に合わないパターン使用から、コミュニケーション機能として意味のある言語使用へと徐々に発達していった。

第二期 短期目標

パターン処理を減少させ創造性の発達を促す

平成14年 4 月～15年 2 月 S34～S61

第一期の後半から主に視覚を用いた様々な創作活動を取り入れ、自由な表現力や創造性を発達させることを目標にあげてきた。第二期では音楽活動によって創造性を発達させることを目標にした。

サウンドブロックを用い、最初は Th が 4 つの異なった音を提供し、対象児にそれを模倣させることを行った。対象児は Th がたたいた場所を視覚で確認すれば模倣することが出来た。しかし音を聴いただけでは困難であった。次に Th と対象児とで交互に好きな音を出し、簡単な即興を行った。初めは Th の模倣を行ったり、常に同じ音だけを出していたが、次第に様々なメロディーを自由に表現できるようになった

この時期は動物、果物、乗り物が描いてある12枚の絵カードを用い、対象児にグループ分けをさせる活動も行った。これは対象児の得意な視覚を用いた活動ということで容易にこなすことが出来た。次にカードに描かれている以外の動物などを描画するよう指示したが、これは出来なかった。Th は対象児が理解しやすいように、犬や猫を描くようにと具体的な指示をしたがやはり描かなかった。対象児にとってその場に存在しないものをイメージし、表現するという作業が極端に苦手であった。また概念の形成にも問題があると考えられた。この活動の際対象児は、カードにぐちゃぐちゃに色を塗ることを行っており、Th の話を全く聴いていなかった。やりたくないためにあえて無視をしているというより、聴覚が機能していないという印象であった。このような対象児の反応は他の活動の際も見られることがあった。次のセッションにおいて Th が対象児に「動物園にいる動物を言ってごらん」と指示をすると、「犬、猫、きりん」と答えが返ってきたが、それを描画することはやはり困難であった。しかし Th が「犬のおまわりさん」や「ぞうさん」の曲を弾き、その曲に出てくる動物のカードを取らせると正しく行えた。聴覚からの情報でもそのものをイメージすることは可能であった。

これらの活動の他に、第一期同様積み木も行った。対象児は毎回 TV のアニメに登場するもの

を創作していた。それらの内容を対象児に説明させると、意味の通じないことを言っていたり、2つのアニメの話が同時に出てくることもあった。また糸電話を取り入れて、対象児がThに電話するという想定で、状況に合った会話を引き出しやすい環境を作った。しかしここでも対象児はアニメに出てくる台詞を繰り返し言ったりしていた。毎回同じ内容のことを言うため、Thが対象児の言うことを先に話すと「それは自分が言うことだ」と怒ることが見られた。

第二期の対象児は、Thの指示に従わないなど反抗的な態度をとることがあった。またセッションの場で行うことをパターンで認知しており、Thが新しい課題を取り入れようとすると拒否することが見られた。柔軟で臨機応変な対応はやはり苦手なようであった。また対象児は聴覚と視覚がそれぞれ発達しているものの、それらが統合されていないと考えられた。それはThが弾く曲の調性の違いを指摘したり、ツリーチャイムの高さが前回と違うことを指摘するなどのことから推測された。

第二期の対象児はまだパターン処理の強さが目立ったが、簡単な即興演奏などにより、自由な表現が出来る場面も見られるようになった。また音楽を聴いてその内容をイメージすることも出来るようになり、対象児の支離滅裂な連想から次第に現実的な思考が可能になったと考えられる。

第三期 短期目標

現実的な思考力の発達 認知機能の発達

平成15年6月～16年12月 S62～S86

第二期までに行った活動の中で、対象児はTVのアニメの内容を毎回同じように表現することが目立ち、対象児の中で現実と非現実の出来事が混同していることが推測された。対象児に自由に創作活動をさせるとアニメの非現実の世界のみにとどまってしまうため、第三期ではThが様々な曲を弾き、そこから連想するものを描画する活動を行った。例えば「海」の曲を聴いて、対象児に実際に行ったことのある海を描画するよう指示した。最初はやはりアニメに出てくる海を描き、その話に登場するものだけを描いていた。しかし回を重ねるうちに実際に行ったことのある海を想定

し、対象児と両親の3人で遊んでいる絵を描くようになった。他にもThが弾く曲に登場するものを正確にイメージして描画するようになった。またThが「雨」を弾き、対象児に雨のときに使うものや、雨から連想できるものを描画させた。対象児はかさや水溜り、さらにかさを持って対象児を迎えに来校する母と、一緒に帰宅する自分の姿を描いた。音楽と対象児の思考を一致させることで、現実検討能力を発達させることが出来たと考えられる。しかし最初は対象児の絵は非常に表現力が乏しく、動物は顔しか描かず、人間もすべて同じように表現していた。

対象児が第二期において、Thの指示に従わず、反抗的な態度を示したことは、セッションで行うことの見通しが立たず、不安感を持っていたためであると判断したため、この時期ではセッション開始時にその日行う内容を対象児に書かせ、流れを理解させた上でセッションを開始した。この方法によりセッションを円滑に進めることは出来たが、かえって対象児のパターン処理を強めてしまう可能性があった。S67からは対象児が自身で遊びを発見できる時間を作るため、「自由時間」という形で一切課題を与えずに、対象児が好きなことをしてもいい時間を設定した。しかし対象児は新しい遊びを行わずに、前回描いた絵をそのまま描いたり、その日に描いたものを再び同じように描くことが見られた。

その一方で曲を聴いて連想できるものを描く活動においては、対象児が連想する内容が膨らみ、Thが何曲か順番に弾いていき、対象児がそれぞれを絵で表現し、最終的にそれらすべての絵を用い紙芝居のようにあるひとつの物語を構成するという、高度な活動も行うことが可能となった。その内容も以前のように非現実的なものであったり、支離滅裂なものではなく、実際に対象児が経験したことや、経験する可能性のある現実的な内容に変化していった。その後のセッションで、描画は行わずThが弾いた曲に登場するものを対象児に列挙させ、それらを登場人物にしてある物語を構成する活動を行った。これは対象児の発達段階では困難であったと考えられ、再び支離滅裂な内容になったり、すべての物語に、共通するアニ

メのキャラクターが登場するという現象が見られた。このことから音楽聴取と描画を組み合わせた活動は、音楽によって引き起こされた内容を連想するだけでなく、実際に視覚で確認できる形で表現することにより、対象児自身で自分の思考をフィードバックさせやすくしたと考えられる。

第三期の活動を通して、現実的で柔軟な思考力が発達したと考えられる。またそれに伴い、対象児は臨機応変な対応が出来るようになり、セッション開始時にその日行うことを確認しなくても、Thの指示に従い活動することが可能になった。認知機能に関しても、トーンチャイムを用い、音と自分の順番を認知すること、また音の強弱や複雑なリズムを模倣することにより発達させることが出来たと考えられる。

V. 考 察

以上の治療過程の中で治療開始時に対象児の最も目立った特性であった、パターン処理能力の強さを弱め、柔軟な認知機能の発達を促進させた要因として、音楽聴取とそこから連想できる描画を組み合わせた活動を取り入れた点があげられると考えられる。当初行っていた自由な創作活動は、対象児の非現実的な思考段階での表現にとどまり、現実的な思考能力の発達を促すことが困難であった。それに対し、ある音楽を聴取しての描画活動は対象児の思考にある一定の枠組みを持たせ、その中だけでの連想にとどまらせることが出来たため、非現実的思考へ飛躍することをとどめることが出来たのではないかと推測される。また音楽そのものに「音楽は知的過程を通らずに、直接情動に働きかける」という特性があるため、言語による指示に比べ音楽を使用したことで、対象児の連想を容易にさせたと考えられる。

また今回の治療において、描画活動そのものを取り入れたことにも治療的意義があったと考えられる。「描画の大きな特徴は非言語的な表現にある。一略一描画表現の中には、単なる言語表現では到達できない精神内界の深いところを投影し、意識下に抑えられている諸問題を教えてくれる場合がある。それは言語を媒介とせず、手を自由に動かすという一種の身体活動に大きくあずかっ

ているからである。言語表現を考えてみた場合、そこにはブローカーの中枢やウェルニッケの中枢などの言語中枢が介在しており、この中枢を通して内界の諸問題が言語として表現されるわけである。したがって、そこでは脳内の知性化の道を通らなければならないが、これに対して描画表現では、手を動かしさえすれば、そこに何かが表現できるのである。一略一自分が描いた絵の中に、考えもしなかった意味表出が行われている場合がしばしばある。ましてや、心に病を持つ人は、意識下の世界に不安や葛藤を抑圧しているので、思いもかけない表現が無意識のうちに行われていることが多いのである。以上のように、絵画療法の最も大きな特徴の一つは、非言語的な意識下の意味表出であるが、その他に、表現行為それ自体が有するカタルシス効果の持つ意味も大きい。」¹⁾このように対象児の苦手とする言語表現ではなく、視覚を中心に用いる描画表現を行うことで対象児の自己表現を容易にし、絵という形に残すことで達成感を味わうことも可能にしたと考えられる。そこに聴取した音楽の内容という一定の枠組みを持たせることで、非現実的思考ではなく現実的で健康な思考の面にアプローチし、引き出すことが容易になったのではないかと考えられる。

対象児のこのような非現実的思考から現実的思考への移行は、一次過程から二次過程への発達と考えられる。「フロイトは『夢判断』において、夢が願望充足の心理過程であり、この願望充足が視覚映像的な欲動の幻覚的満足という最も原始的な心理過程によって行われる事実をあきらかにした。このような原始的な心理過程を、フロイトは、論理的にも発生的にも最初に成立する心理過程という意味で、一次過程とよんだ。一略一この一次過程の機能は、快感原則に従い、欲動が高まると純粹に内的な心理過程の中で、かつてその欲動が実際に満たされた満足経験つまり快の記憶痕跡に基づいて、そのような満足体験＝快と結びついた表象を幻覚の形で再現することにある。このような満足経験の記憶の再生は、幻覚的な形での対象像の知覚の再生という意味で、『知覚同一性』とよばれる。そしてこの一次過程こそ、夢や神経症の症状を形成する根源的な心理過程であるが、一

略一心的組織の発達が進むにつれて一次過程による幻覚的満足の方法によっては、心的な均衡を保つことができなくなり、外界との現実関係を考慮して現実の変化を引き起こすことによる欲動の満足の方法が獲得されるが、それとともに現実原則に基づく二次過程が成立するという。二次過程は覚醒思考、注意、判断、推論、予測をもった行動などの心的機能を営み、思考相互間の同一性を追及する。つまり『思考同一性』は、快感原則に従う『知覚同一性』を修正し、表象間の論理的関連を明確にする。つまり、この現実原則に従う二次過程は、言語、思考、運動機能の発達と並行するが、その意味で二次過程は外的な世界に対する適応を目的として発達するということができる。」²⁾ 対象児は一次過程思考から二次過程思考へ発達したことにより、現実検討能力も獲得したと推測される。

また対象児が表現した絵画を通して、Th と対象児の間で言語コミュニケーションを活発に行うことが出来た。それも対象が何も存在しない状態では、対象児の非現実的な内容が表面化することが多かったが、絵画という枠組みのもとでの言語コミュニケーションをとることで、その絵の内容に見合った話を相互にすることが出来た。そこから Th と対象児の間で相互理解も深めることが出来たと考えられる。「絵画療法では、患者—治療者関係のなかに描画などの表現媒体が加わった三者がお互いに反応しあう場が開かれており、そこにおける相互の理解が、患者の描画表現に同化され、そこからまた両者の相互理解が進むという循環運動が繰り返される。」³⁾

今回の治療に用いた音楽技法は、主に「BASIC TONE」の中の連想と物語構成法であった。連想とは、治療者が任意の音を提示し、対象者に何か思い浮かぶことを話してもらおうという方法で行わ

れる。これは音楽を聴いて連想する働きを利用する技法である。また物語構成法は、治療者がいくつかの音を連続して聴かせ、物語を作らせる。難しい場合には場面や主人公など、治療者が少しずつ質問しながら物語にしていこうという方法である。これは連想をさらに発展させた方法であり、作られた物語の中に、対象者自身の様々な内面や関心等が投影されていくことを利用した技法である。今回はこれらの音楽技法に描画活動を組み合わせて使用した。また対象児の発達段階に応じて連想から物語構成法へと段階をあげていった。

以上のような治療過程を経て、対象児のパターン処理能力を弱め、長期目標にあげた柔軟な認知機能の発達を促すことが出来た。これはピアジェの発達段階における、前操作期の直観的段階から具体的操作期への発達を意味すると推測される。それに伴いコミュニケーション機能としての言語も発達したと考えられる。

今後の課題として、描画活動にとどまらず、音楽による自己表現など幅広い創作活動を行うことで、さらに柔軟な認知機能の発達を促していきたいと考えている。その際 Th として心掛けなければいけないことは、対象児が自由に自己表現できる環境をすることであり、音楽療法の場合対象児にとって、自分が受容される場として位置付けられることであると認識している。

引用文献

- 1) 徳田、村井編 アートセラピー 日本文化科学社 P.14-15 1999
- 2) 小此木啓吾 現代の精神分析 講談社学術文庫 P.59-60 2002
- 3) 氏原、小川他共編 心理臨床大事典 培風館 P.558-559 2000

参考文献

松井紀和編 音楽療法の実際 牧野出版 1998